

1. 京田辺市シオ 1 号墳の調査

京都府立大学文学部考古学研究室

1. 調査の経緯

シオ 1 号墳は、京田辺市天王の山中にある古墳で、枚方市との境になる尾根近くに立地する。人里離れた古墳であるが、1928 年および 1929 年の史跡調査のうちに存在が報告され（佐藤 1930）、横穴式石室が良好に残される古墳として知られた存在であった。そのため 1993 年には京田辺市の指定文化財となっている。

南山城地域では横穴式石室の分布が他地域に比べて少なく、遺存状態もさほどよくない。木津川右岸では城陽市黒土 1 号墳が大型の横穴式石室で、天井近くまで側壁が残っているが、このような例はごくわずかで、とりわけ左岸では遺存状態のよい横穴式石室はほとんど知られていない。京田辺市内においても、下司古墳群が早くから知られた存在であり、シオ 1 号墳とともに普賢寺谷の古墳として報告されているが（佐藤 1930）、天井石を失うなど、破壊を被っている。当該地域において天井石まで遺存するシオ 1 号墳の重要性は明らかであり、市指定史跡となっていることも首肯される。シオ 1 号墳については過去にも測量調査が実施されてはいるが、この古墳の評価が十分にはできていないと考えられることから、京田辺市史の編さんにあたり、改めて墳丘および石室の実測図を作成することとした。

調査は、まず基準点を配置するため、2019 年 2 月 27 日に（株）相互技研により GPS 測量を実施した。この際に、仲林篤史氏（東大阪市教育委員会）の協力を得て写真測量（SfM/MVS）もおこなった。また同時に基準点のトラバース測量もおこない、墳丘および石室を国土座標を用いて測量する準備を整えた。その後、3 月 4～8 日まで、墳丘の測量と石室の平面・立面図の作成をおこなった。墳丘の測量はトータルステーションを用いて XYZ 座標を取得する方法を用い、おおむね墳丘上では 0.5 m、その外では 1 m ピッチで測るようにした。石室の実測にあたっては SfM/MVS によるオルソ画像を下図として活用した。

調査は京田辺市市史編さん室が事務局となり、現地においても助力を得た。京都府立大学か



写真 1 石室内調査風景



写真 2 シオ 1 号墳周辺から東方向への眺望

らの参加者は以下の通りである。

菱田哲郎、諫早直人（以上、教員）、陰地祐輝、田口裕貴（以上、博士前期課程）、岡田大雄（4回生）、鈴木康大（3回生）、池田野々花、小林楓、溝口泰久、湯浅美玖（以上、2回生）
（菱田哲郎）

2. 古墳の地理的・歴史的環境

シオ1号墳は標高305.6mを頂点とし、大阪府との府境をなす山系の東側斜面、標高184m付近に所在する。周辺の地質は領家花崗岩帯に属する⁽¹⁾。古墳が位置する斜面の麓をみると、500mほど北方を府道71号枚方山城線が走り、700mほど南方には天王集落が広がる。さらに、1kmほど東方には普賢寺谷とその集落があり、古墳の付近からは普賢寺谷やさらに先の京田辺市街地を望むことができる（写真2）。また、古墳の西方は現在では木々が茂るが本来は枚方市側へも眺望が開けていたとおもわれる。こうした周辺の道や集落は、古くから山城と河内を結ぶルートに位置していたようで、近世の国絵図には「普賢寺越（尊延寺越）」や「天王越（穂谷越）」といった道の名前がみられる⁽²⁾。このうち普賢寺越については古代から利用されていた可能性が指摘され、山本駅で古山陰道から分岐し、山陽道の門戸ともなる樟葉へ向かうルートであったと考えられている（和田1981）。

一方、シオ1号墳の近辺には目立った遺跡はみられない（図2）。北西方300mほどの集落内に「丸塚」と呼ばれ、古墳の可能性が指摘される高まりが存在する程度である（村田編1959）。麓の普賢寺谷に目を向けると、弥生時代後期の集落遺跡である田辺天神山遺跡から、

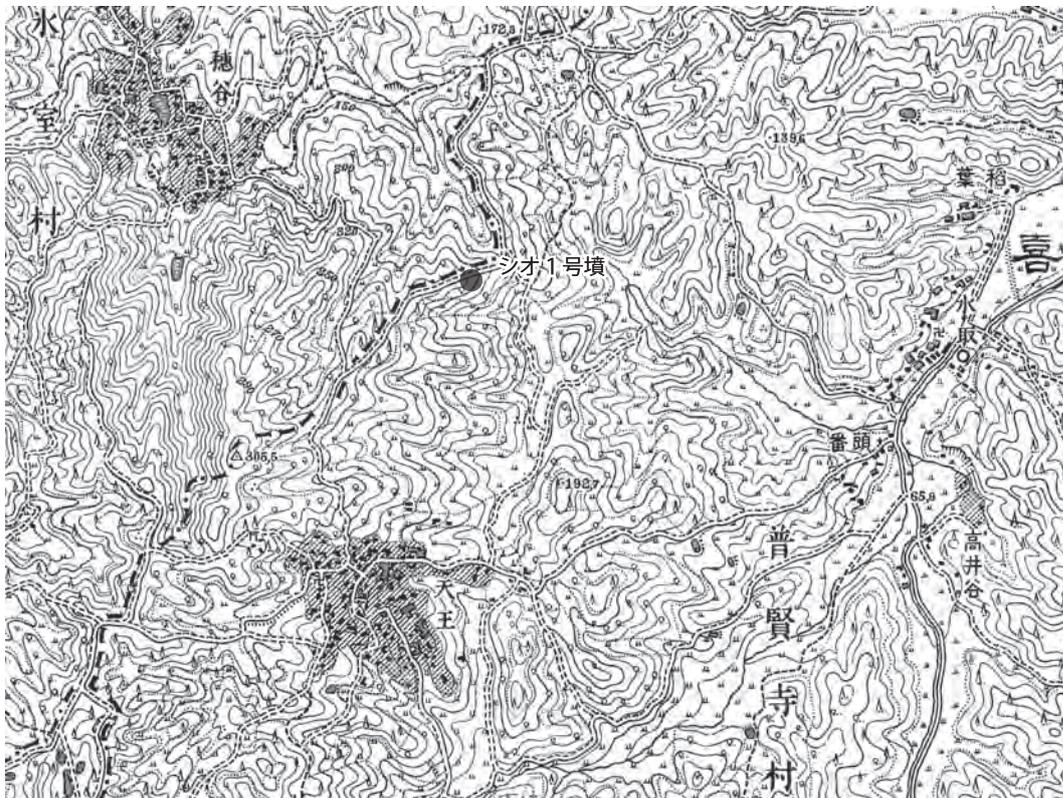


図1 シオ1号墳と周辺の地形（正式2万分の1地形図「田邊」に一部加筆）

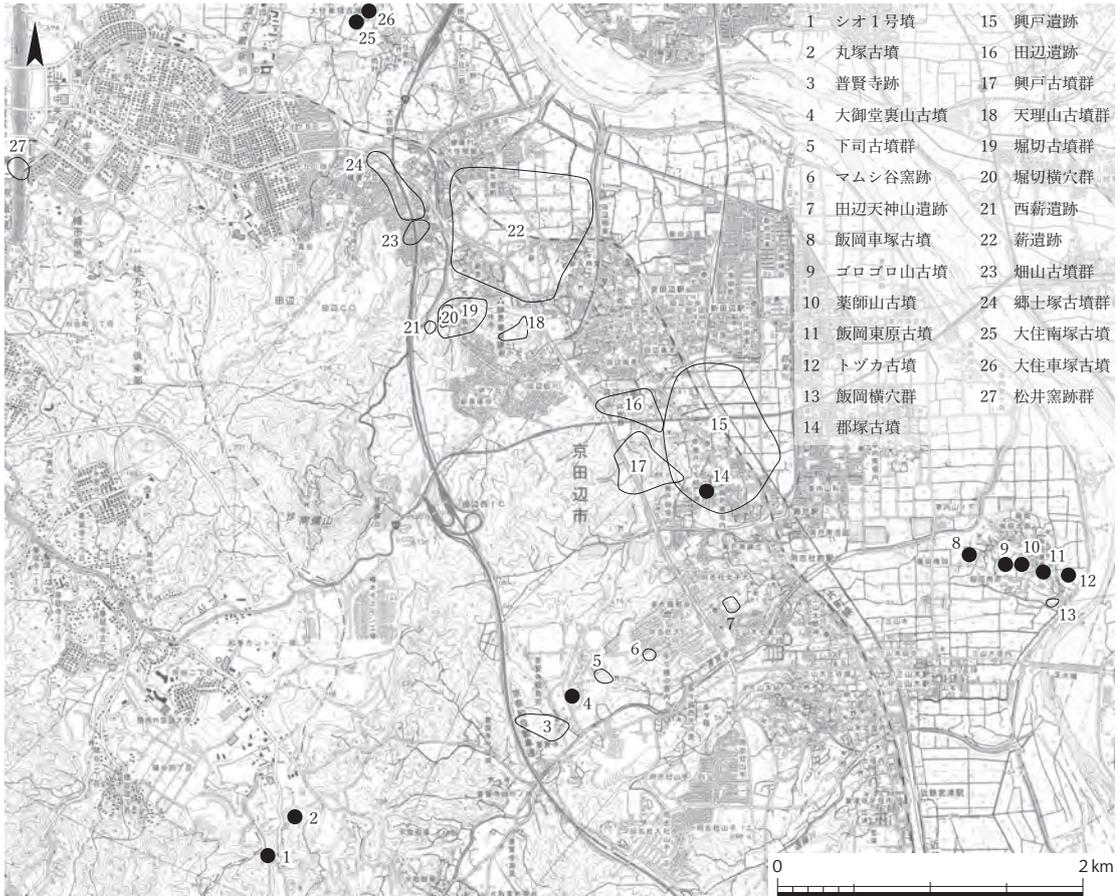


図2 京田辺市内遺跡分布図

(国土地理院 25000 分の 1 地形図「枚方」「田辺」、および田辺町教育委員会 1995 をもとに作成)

古墳時代終末期に位置づけられる下司古墳群および大御堂裏山古墳、7世紀後半に創建された普賢寺跡や8世紀前葉に操業したマムシ谷窯跡にいたるまで、長きにわたる人々の活動が確認されている(同志社大学校地学術調査委員会編 1985 ほか)。とくに下司古墳群は1963年および1983年の発掘調査の結果、普賢寺谷の北側、標高80m前後の斜面上で8基の横穴式石室墳が確認され、副葬土器に加えて鍍金銅鉾、鍔座金具などが出土した。近在する大御堂裏山古墳を含めて7世紀前葉から中葉に造営されたとみられ、被葬者については普賢寺の造営氏族との関連も考えられている。なお、京田辺市内の平野部の古墳時代後期を中心とする遺跡の展開については、本書第Ⅲ部第3章にて詳述する。

3. 既往の報告

シオ1号墳が初めて報告されたのは『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第11冊においてである。ここでは「普賢寺谷の古墳」のうちの「第二號古墳」として写真とともに報告されている。「丘陵の傾斜面雑木林中に数基の土饅頭を存す、羨門を開きしもの一基あり」と述べられており、当時は1号墳以外にも墳丘が遺存していたようである(佐藤 1930)。1959年刊行の『田辺町郷土史 古代篇』も、この報告を引用するが、付近の土饅頭式の塚は確認するの

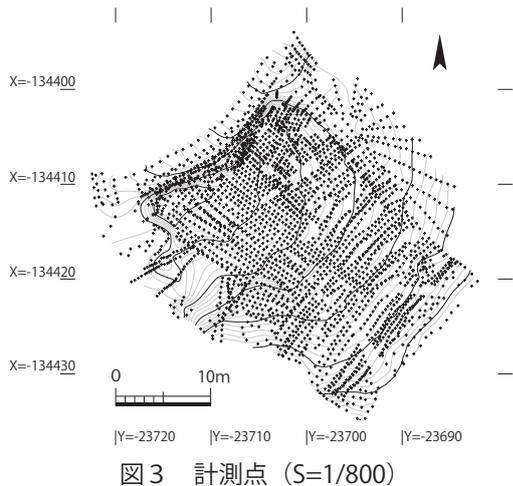


写真3 墳丘 (最高所より南東方向)

が困難だと記している（村田編 1959）。その後、旧田辺町による分布調査では、花崗岩の小さな割石を使用した両袖式石室として報告され、南西方に転落していた2個の巨石を2号墳のものと推定している（鷹野 1982）。1987年には、杉本優子によって羨道部が崩壊した無袖式石室として初めて実測図が報告された（杉本 1987）。報告では1号墳の時期を6世紀後半とし、立地から普賢寺谷の勢力を背景に造営された可能性も指摘している。また、1号墳の北方20 mに円墳が存在するとし、これを2号墳と呼んでいる。

このように、シオ1号墳についてはこれまでいくつかの報告がなされてきたが、築造時期や袖部の形態など、その評価についてはいまだ不明瞭な点が多い。なお、1号墳以外の古墳については先行研究によって位置が異なり、今回の調査に際して周辺を踏査したが、1号墳の周辺に別の古墳の存在は確認できなかった。ただし、今後改めて周辺で古墳が確認される可能性も十分あり、本稿では市指定文化財の名称にしたがいシオ1号墳と呼ぶこととする。（岡田大雄）

4. 墳丘

今回、測量をおこなったのは石室を中心として北西—南東方向、北東—南西方向にそれぞれ約30 mの範囲である。測量にはLeica Giosystems社 TCR405、TCR405powerを用いて2081点を計測し、Gio Look社 Gioline (Ver.4.70) およびGolden Software社 Surfer13を用いて等高線を作成した（図3・4）。測量範囲での最高所は石室開口部から北西へ17 mほどの地点で標高は187.6 mを測る。その北側には北東—南西方向に通る里道によって高低差2～3 mの崖が形成されている。最高所より北西から南東方向にかけては約10度のなだらかな斜面が広がっている（写真3）。この斜面の裾は開口部付近の184 m前後に弧を描くように存在し、最高所から裾までは20 m程度を測る。この斜面の北東側には上述した里道から分岐して石室へ向かう道とそれに伴う平坦地がある。斜面の南西側は階段状に落ち込む地形を呈する。さらに、開口部から南東方向へは同じく約10度の傾斜が幅10～15 mにわたって直線的な等高線を描いて続いていく。この傾斜は少なくとも長さ10 m程度はあり、測量をおこなった範囲では大きな傾斜の変化はみられない。

既往の報告では墳丘は流失しており、墳丘の形状や規模は不明とされている（鷹野 1982、杉本 1987）。また、1987年に報告された測量図では里道とそれに伴う崖は存在していない一

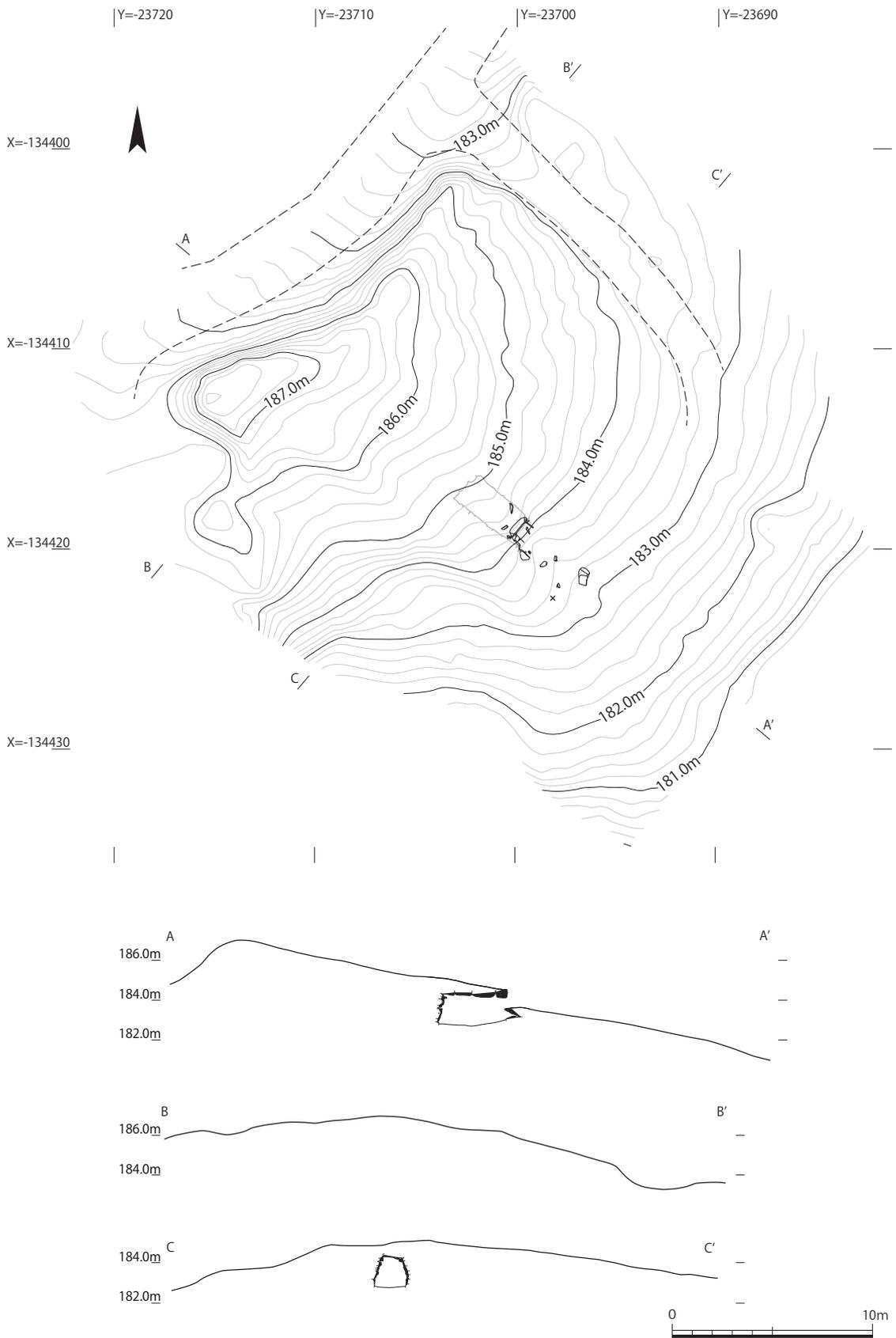


図4 シオ古墳墳丘測量図 (S = 1/300)

方、石室南東側に道が通ることが示されており、現在残る階段状の落ち込みはこの道の造成に伴うものとみられる。なお、現在石室へ向かう北東側の道は、1987年報告の測量図にはみられず、少なくともそれ以降に利用され始めたようである。すなわち石室北西側の崖、南西側の落ち込み、北東側の平坦地は比較的最近の改変によるものと考えられる。

一方、羨道や前庭にあたる部分が原形を留めないため、ある程度の土砂の流失は考慮する必要があるが、石室開口方向へなだらかに下りていく傾斜面は比較的現状に近い可能性がある。さらに、現状石室の周囲を裾部がめぐるような様子は後世の改変によるとみられるものを除いては確認できない。こうした点を積極的に評価するのであればシオ1号墳は当初より明確な墳丘をもたない古墳であったと想定することもできる。

また、今回の調査では上述のように石室前面に広がる緩傾斜の終端を確認できていないが、

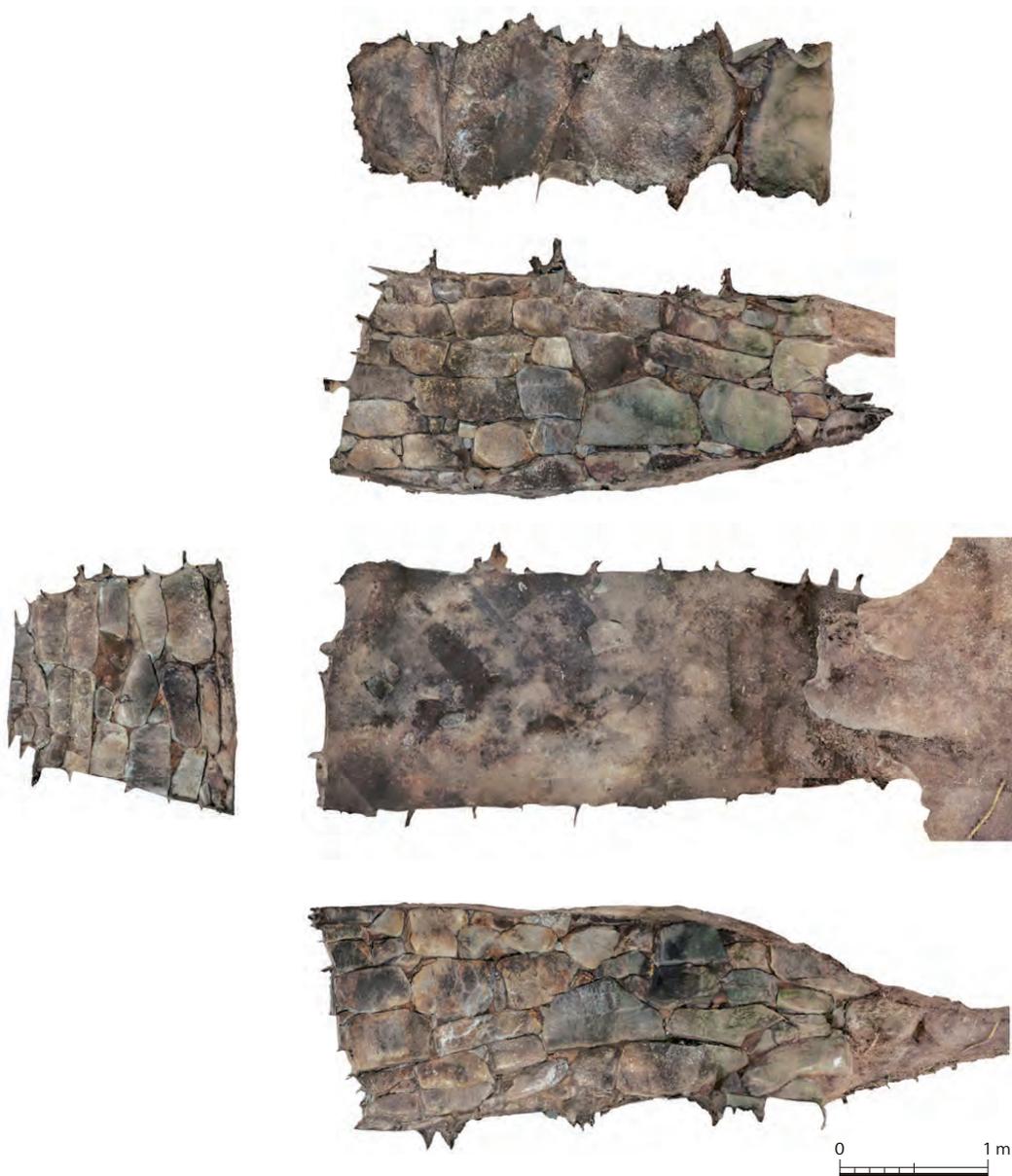


図5 横穴式石室オルソ図 (S=1/50)

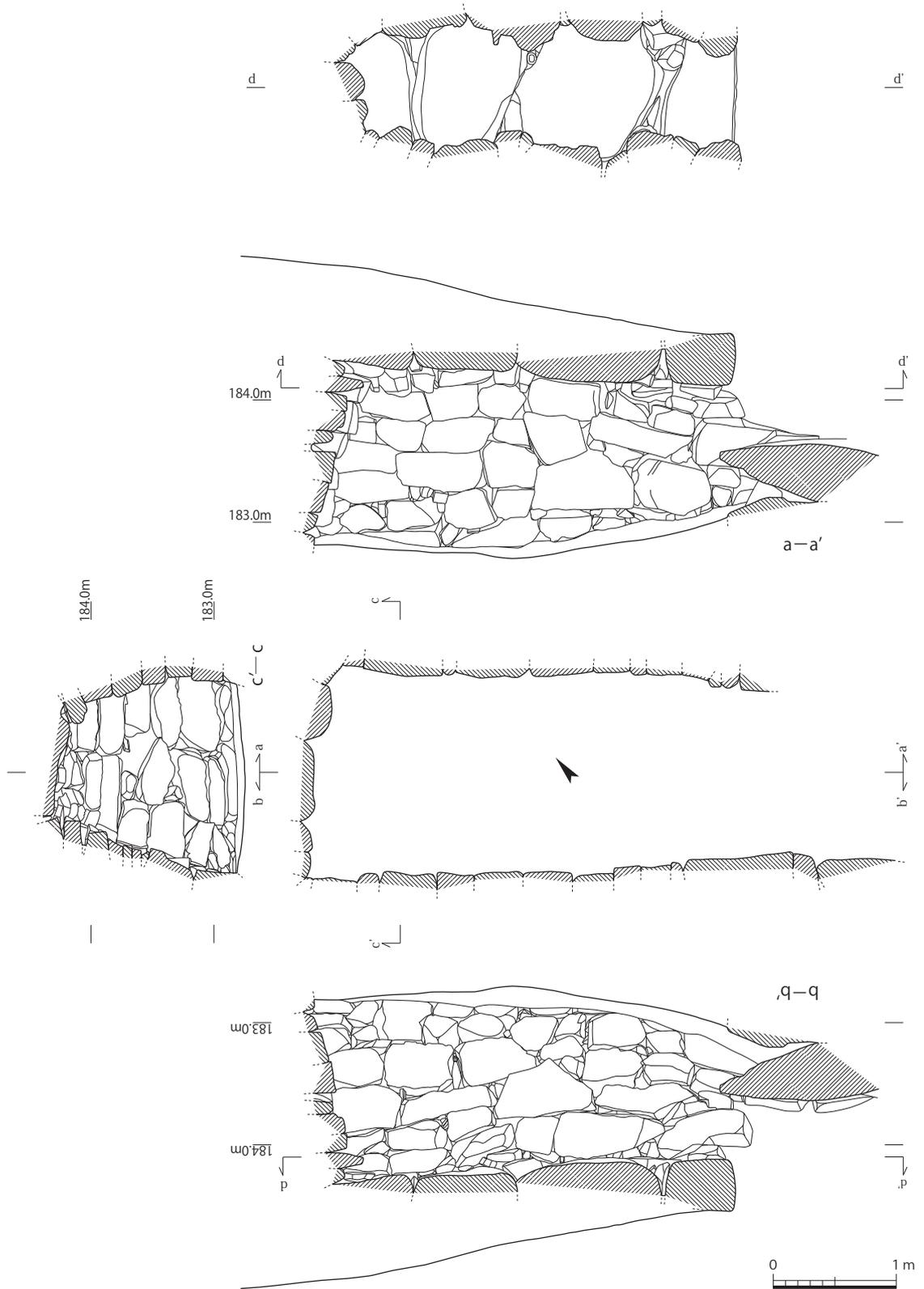


図6 横穴式石室実測図 (S=1/50)

終端の位置と形状によってはこの傾斜面が石室前面のテラス状の地形をなす可能性も考えられる。その場合、シオ1号墳の墳丘や墓域に関しては、石室付近にとどまらず、より広い範囲でとらえていく必要があるだろう。(陰地祐輝・岡田)

5. 石室

(1) 石室の現状

南東方向に開口する横穴式石室である(図5・6)。主軸は座標北に対して西へ50度程度傾いている。現在観察できる大部分は玄室部で、羨道部の多くは埋没したか、あるいは石材が抜き取られたとみられる。石室床面には開口部側を中心に流入土が分厚く堆積している。なお、開口部から南東方向へ約4mの範囲には石材が点在しており、石室を構成していた可能性がある(図7)。

(2) 石室の規模・構造

石室の平面規模は中軸線上の長さが3.5m以上、幅は奥壁沿いで1.7m、開口部付近で1.4mを測る。標高は現状の床面の最も低いところで182.70m、天井の最高部で184.30mである。床面は流入土に覆われているため、築造当初の寸法を正確にとらえることはできないが、天井石までの高さや壁面の立ち上がりからみて奥壁付近の堆積は比較的浅いとおもわれる。さらに、平面形態は現状の平面図では開口部に向かって幅が狭くなるように見えるが、床面の埋没状況と壁の傾斜を勘案すると奥壁付近から大きくは変化しないといえる。

石室の壁体は長辺30～90cmの石材を横位に複数段積み上げ構築されており、隙間には長径20cm前後の石材を詰める。石材が抜け落ちた部分や石積みの隙間では裏込めとみられる小ぶりの石材が確認される。各壁体で使用される石材の規模と積み上げられる段数は表1に示した通りである。天井石までの高さは奥壁沿いで1.5m、開口部付近で1.1mを測る。

奥壁は内側へ15～20度程度傾いて構築される。石材の形状と大きさは側壁と比べて全体的にそろっており、中央部に長軸を上下に傾けた石材が存在する以外は、おおむね石材の長軸を横位に据えて積み上げられる。壁体の下から3分の2あたり、標高183.75m付近には横方向に目地が通る(図8)。この目地を境として、1段あたりに使用される石材の数は目地以下が3石、以上は2石に変化している。これは側壁の傾斜に合わせたものであろう。また、奥壁

表1 側壁の石材と段数

	部 位		石 材	段 数
左側壁	目地以上	上部	30cm以下	天井石までを調整
		下部	長辺40cm前後	1段
	L=183.20m前後から目地まで	奥壁側	長辺70～100cm、短辺30～40cm	2段
		開口部側		3～4段
	L=183.20m前後より下	開口部側	長辺30～40cm	1段あるいは2段
奥壁側		長辺70cm前後	1段	
右側壁	目地以上	上部	30cm以下	天井石までを調整
		下部	長辺50～80cm	1～2段
	L=182.90～183.15mから目地まで	長辺70～100cm、短辺30cm前後		2段
		L=182.90～183.15m以下		長辺30～40cm
※一石のみ一辺30～40cm、正方形に近いものを1段積み				

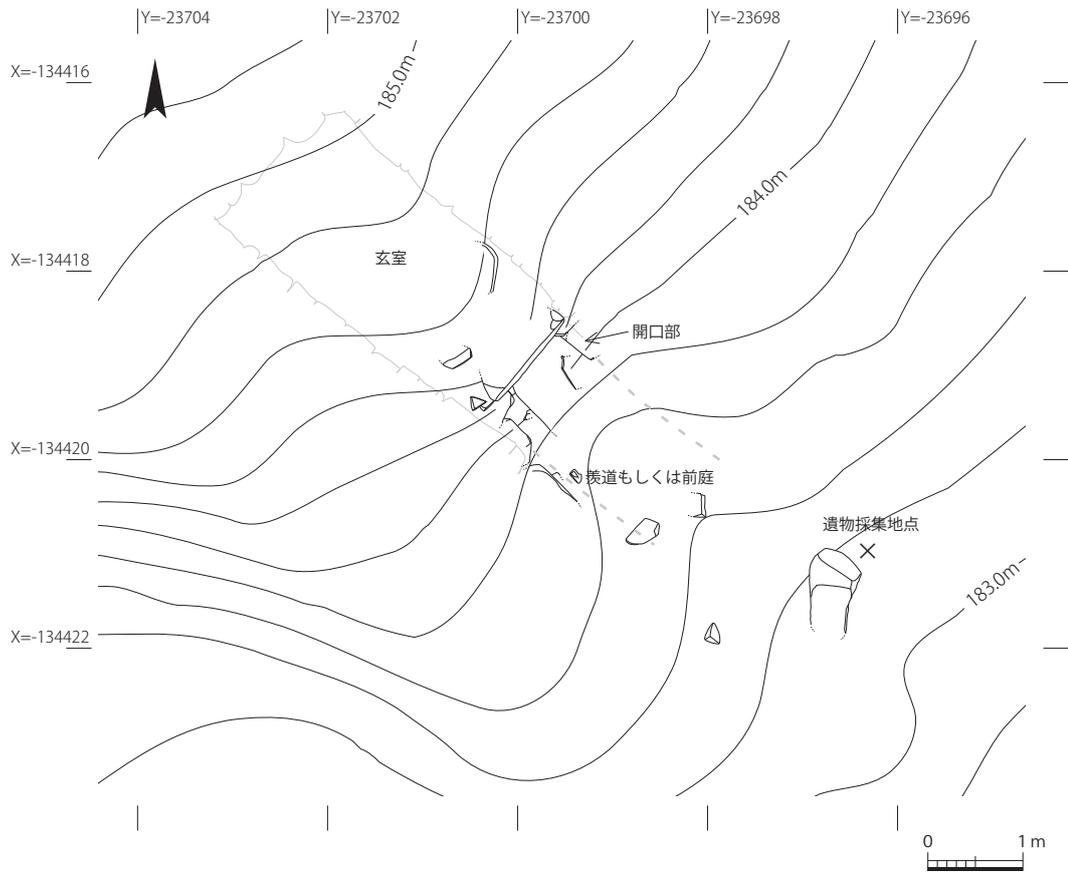


図7 横穴式石室周辺の状況と羨道部の復元 (S=1/80)

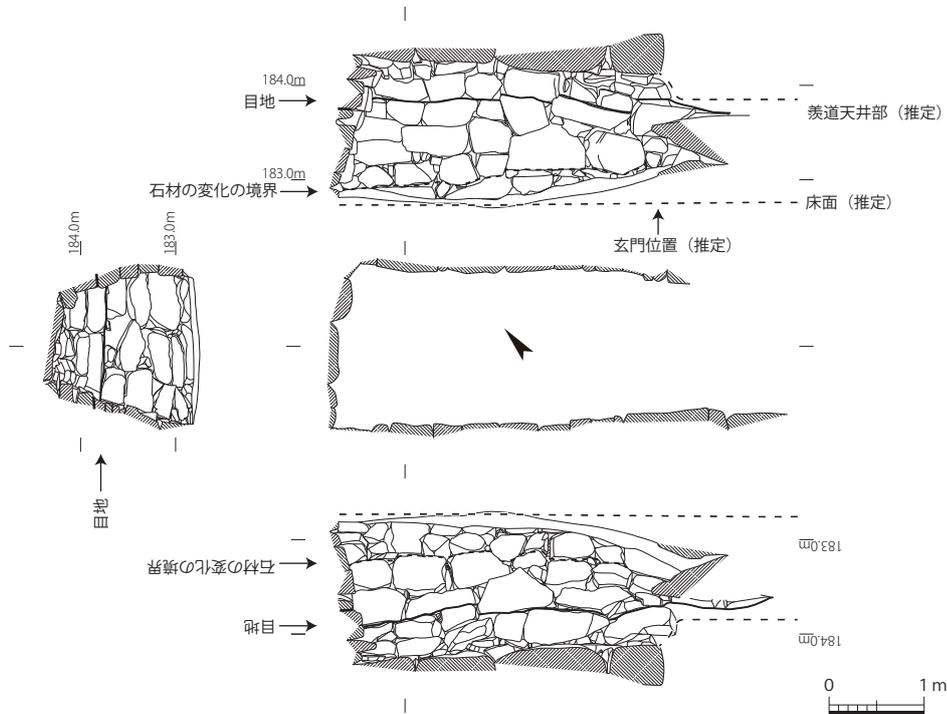


図8 横穴式石室の特徴 (S=1/80)

は左側壁とは鈍角、右側壁とは鋭角の隅部をなすように接しており、壁体は左側壁に向かって内側に入り込んでいる。

側壁は左右とも 20cm 程度垂直に立ち上がったのち、内側へ 15 度前後、内傾するように構築されている。壁面の高さは天井石が失われた部分では 30cm 程度低くなる。

側壁においても目地が観察され、高さはおおむね標高 183.85 m と奥壁の目地とも近い位置にある（図 8）。目地は開口部付近の一段低くなった壁体の上端に接続しており、本来はさらに先に続いていたことが想定される。さらに、この目地よりも下では右側壁では標高 183.20 m 前後、左側壁では標高 182.90 m から 183.15 m の付近を境として、表 1 にも示したように石材の大きさが上下で変わる様子が観察される。この変化の境界は、いずれも斜めに傾斜する部分や途切れる部分があり、必ずしも壁面全体を一直線に通るものではなく、目地とはいいたい。側壁を積み上げる際の構築単位を反映しているとも考えられる。

また、側壁の石積みの特徴としては石材を斜めに据えるという点も挙げられる。これが石積み技法上の特徴を示すものであるのか、石材の形状の制約によるものであるのかはわからないが、目地が一直線に通らない一つの要因とおもわれる。目地の傾きは左右の側壁で異なる。

天井は長さ 3.0 m、幅 0.7～1.0 m で、天井には長辺 200cm 前後の石材が 4 枚架構されている。そのうち開口部側の石材の長辺は石室主軸と直交するように設けられている。天井高は先述のように奥壁から開口部に向かってわずかに低くなっている。

（3）袖部形態と羨道部の復元

以上のような石室の調査成果を踏まえ、袖部形態と羨道の復元を試みる。

まず、玄門位置は奥壁から約 3.5m、図 8 の矢印で示した付近と推定した。その根拠は以下の 2 点である。まず、残存する壁体の高さがここを境に変化することである。後世に側壁上部の石材が抜き取られた可能性もあるが、左右両側壁の高さがほぼ同じように減ずることから羨道部の側壁の高さをおおむね留めるものと考えている。この高さは側壁を通る目地とも一致する。2 点目は側壁高の変換点と現存する天井石の端が一致する点である。天井石の形状もほかのものとは異なり、両壁の石材に合わせるように端部が一直線となっている。こうした点から、奥壁から約 3.5m までの天井石の残る範囲を玄室、それより南東側を羨道と考えることができるのではないだろうか。

次に、袖部形態については袖部付近が埋没しており判然としない。しかし、玄室と羨道の中軸がおおむね一致する上に、現状で計測可能な羨道幅は約 0.9m で、玄門寄りの玄室幅と大きく変わらないことや、露出する範囲では袖部にあたる構造がみられないことから、無袖式と考えられる。ただし、発掘調査をおこなっていない現状では埋没範囲にわずかな袖部をもつ両袖もしくは片袖式である可能性も完全には否定できない。

さらに、羨道については、開口部から南東側には羨道を構成していたとみられる石材が露出しており、地形も直線上にわずかにくぼむ様子が観察される（図 7）。石材の分布と地形のくぼみの範囲から、開口部から 4 m 程度は羨道や前庭が続いていた可能性が高い。また、開口部付近の床面に露出する大型石材は、羨道の天井石が崩落したものとみられ、その位置から前壁を構築していた石材の可能性もあろう。石材の厚さは 40cm 程度で、前壁高もこの値に近いと考えられる。残存する羨道側壁の上に、玄室側壁と同様に小ぶりの石材が積み重ねられていたこと

を想定し、図8では前壁高は0.3m、羨道高は1.1m程度と推定した。

(4) 小結

以上のように、シオ古墳の主体部は無袖式横穴式石室である可能性が高い。

玄室の平面形態は長さ3.5×幅1.7m程度で、長幅比がほぼ2:1の長方形になると想定される。玄門部や羨道部については、石積みの様子や周辺の地形から、前壁高0.3m、羨道高1.1m、羨道もしくは前庭部長4m以上と推定した。明確な袖部はないものの、前壁や天井石の様子から、玄門を意識した構築がなされた可能性がある。

また、石積みの特徴としては1段あたりの石材が多く、目地を一直線に通すのではなく、石材を斜めにして積み上げる箇所があることなどが挙げられる。側壁では壁面の中ほどに大ぶりの石材が使用されていることも特徴の一つといえよう。(岡田)



図9 シオ1号墳採集須恵器 (S=1/1)



写真4 シオ1号墳採集須恵器

6. 採集遺物

今回の測量調査において、内面に短いかえりをもつ須恵器杯蓋の破片1点を地表面で採集した(図9、写真4)。採集地点は開口部から南東に約4m離れたところである(図7×印の位置)。口縁部が1.4cmしか残存していないため口径や器高を復元することは難しい。内面には短いかえりが認められる。内面はロクロナデによって調整され、外面にはロクロナデと回転ヘラケズリが確認される。色調は黄灰色を呈し、直径0.1~0.5mmの白色粒や黒色粒を胎土に含む。全体を復元できないため細かな年代的検討には耐えないが、かえりの様相から7世紀後半(飛鳥Ⅲ~Ⅳ)に位置づけられる。(鈴木康大)

7. シオ1号墳の年代と位置づけについて

今回の調査では墳丘および周辺地形、石室、土器の観点について新たな情報を得ることができた。これらの新たな情報、とりわけ土器の評価次第では、シオ1号墳は従来指摘されていたような6世紀後半以外の年代が与えられる可能性がある。以下では、調査成果をもとにシオ1号墳の年代について整理してみたい。

まず、墳丘と周辺の地形をみると、開口方向へなだらかに下がる傾斜面の存在が大きな特徴として挙げられる。現状では石室の周囲をまわるような裾部は確認できず、改変や流失を考慮

する必要があるものの、築造当初から明確な墳丘をもたなかった可能性もある。また、今回の調査では石室前面の緩傾斜の終端を確認できていないが、終端の様相によってはこの緩傾斜をテラス状の地形と評価することもでき、より広い範囲の墓域が想定される。

次に石室については、奥壁と側壁が良好に残存しており、おおむね長径 100cm 以下の比較的小ぶりな石材が 6～7 段積み上げられる様子がみられる。従来、近畿地方における横穴式石室の年代的变化としては石材の大型化と少量化が挙げられてきた（太田ほか 2007 など）。既往の報告でもそうした変遷観のもとに、6 世紀後半という年代を提示したと思われる。しかし、開口部付近の状況を踏まえるとシオ 1 号墳はかなり低い前壁を有する無袖式あるいはきわめて退化した有袖式の石室と復元される。この点についてはあくまで推定の域を出ないが、少なくとも 6 世紀後半という従来の年代観に合うような高い前壁や明確な袖部を想定することは困難であり、むしろ前壁や袖部の退化傾向からはより新しい時期を想定できる。

なお、石室の評価にあたっては使用されている石材についても考慮する必要がある。本書第Ⅲ部第 2 章で詳述するようにシオ 1 号墳の石室石材の採取地として至近距離にある花崗岩、ホルンフェルスの露頭に加え、木津川を挟んで対岸の車谷が推定される。車谷の石材は下司古墳群や精華町畑ノ前東古墳群でも使用されている可能性がある。一方で、下司古墳群のうち奥壁をほぼ 1 枚で構築するような石材については生駒山の斑糲岩を用いているとみられる（同志社大学学術調査委員会編 1985）。こういった使用石材の違いが石室構造に影響を与えた可能性は高く、シオ 1 号墳の石室構造の特徴についても使用石材を踏まえて評価すべきであろう。

さらに、採集された須恵器杯蓋には 7 世紀後半という年代が与えられた。採集遺物であることは考慮すべきであるが、シオ 1 号墳が 7 世紀代に利用されていたと考えることは可能である。

また、立地の面では周囲の古墳造営地からは距離を置き、峠に近い眺望の良い山腹に築かれているという特徴が挙げられる。古代になると、背後には河内との国境がせまり、周辺に普賢寺越などの峠越えのルートが通るようになる。これらの特徴がどの程度古墳時代の様子を反映しているかは検討の余地があるが、シオ 1 号墳の年代を考える上でも留意すべきであろう。

このようにシオ 1 号墳の年代は、従来指摘されていた 6 世紀後半よりも新しいと考えられる。土器や石室袖部の様子を踏まえるならば、少なくとも 7 世紀代の古墳と評価することは可能であろう。ただし、これ以上の詳細な年代については現状の測量成果のみをもって検討することは難しい。今後の調査の進展にゆだねたい。（岡田）

8. おわりに

最後に今回の調査成果をまとめると以下の通りである。

まず墳丘については流出や後世の改変が激しく、正確な規模や形態は不明である。現地形の詳細な観察から、当初より明確な墳丘をもたなかった可能性や、石室前面についてはテラス状の地形をなす可能性が想定された。

次に石室については、床面および羨道部が土砂により埋没しており、不確定要素を含むものの、無袖式あるいはきわめて退化した有袖式の横穴式石室とみられる。玄室の規模は長さ 3.5m、幅 1.7m 以上、高さ 1.5m 以上に復元される。石室石材は大部分が付近で採集可能な花

崗岩やホルンフェルスであるが、一部に木津川右岸の車谷付近で産出する特徴をもつ石材がみられた（本書第Ⅲ部第2章参照）。

また、石室開口部付近から7世紀後半（飛鳥Ⅲ～Ⅳ）の特徴をもつ須恵器杯蓋の破片が1点採集された。古墳の築造に伴うものか、追葬を含むそれ以後の祭祀に伴うものかは明らかでないが、周辺の遺跡の分布状況を鑑みれば、この土器がシオ1号墳に伴うことは確実である。小片であり、過度な意味を付与することは避けたいが、古墳築造に明確な上限年代が得られた意義は大きい。

今回の調査はあくまで表面観察可能な範囲に留まるもので、古墳および石室の形態、規模、構造や築造時期や追葬の有無などの確定は発掘調査を待つべきであろう。これらの情報や古墳の立地などを総合することによって導き出される被葬者像についても、今後の課題として残される。一方で石室石材や採集土器など新たな知見も得られた。石室の3次元計測などの新しい記録・計測手法も援用しつつ、現時点において可能な限りの情報を引き出したことに今は満足したい。なお、(株)相互技研によって作成されたシオ1号墳の横穴式石室の三次元データについては、京田辺市史編さんのIT市史の一環で公開されていることを付言しておく⁽³⁾。(諫早直人)

註

- (1) 京都府レッドデータブック2015 (http://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/geo/soil_g.html 最終閲覧：2020年3月1日)。
- (2) 元禄国絵図山城国、天保国絵図山城国（国立公文書館デジタルアーカイブ <https://www.digital.archives.go.jp> 最終閲覧日：2020年3月1日）。
- (3) 3D画像で見るシオ1号墳 (<https://www.kyotanabe.jp/0000014436.html> 最終閲覧日：2020年3月10日)

参考文献

- 太田宏明・森下章司・森本徹 2007 「近畿の横穴式石室をめぐる諸問題」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 佐藤虎雄 1930 「普賢寺谷の古墳」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第11冊 京都府
- 杉本優子 1987 「田辺町しお1号墳」『京都考古』第44号 京都考古刊行会
- 鷹野一太郎 1982 「シオ古墳群」『田辺町遺跡分布調査概報』（田辺町埋蔵文化財調査報告書第3集）田辺町教育委員会
- 田辺町教育委員会 1995 『京都府田辺町遺跡地図』
- 同志社大学校地学術調査委員会編 1985 『下司古墳群—同志社大学田辺校地内所在遺跡の発掘調査報告—』（同志社大学校地学術調査委員会調査資料 No.19）同志社大学校地学術調査委員会
- 西弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真陽社
- 菱田哲郎 2011 「後期・終末期の実年代」『古墳時代の考古学』1（古墳時代史の枠組み）同成社
- 村田太平編 1959 『田辺町郷土史 古代篇』田辺町郷土史会
- 和田萃 1981 「河内の古道」『環境文化』第51号 環境文化研究所



写真5 石室奥壁



写真6 石室開口部（1）



写真7 石室開口部（2）